The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語とフランス語におけるテンス・アスペクト形式と視点 : 日本語の文学作品とそのフランス語翻訳の分析
Author(s)	高橋, 克欣
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 35-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102477
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語とフランス語におけるテンス・アスペクト形式と視点
―日本語の文学作品とそのフランス語翻訳の分析―

高橋　克欣

§1　本稿の目的

本稿の目的は、日本語の文学作品およびそのフランス語翻訳において用いられるテンス・アスペクト形式と視点の関係に着目し、今後の体系的な理論化およびモデル化の前提となる用例の分析を行い、談話における事態描写のあり方を考察することである。

現代ではテンス・アスペクト形式に関わる問題を一文単位でなく談話やテクストの単位で考察することは決して珍しいことではないが、本稿においても談話やテクスト構成の観点からの用例分析を行い、一文単位の考察では的確にとらえることができない視点の問題を論じることとする。

本稿で分析の対象とする作品は、小川洋子氏により 2019 年に発表した長編小説である『小箱』および Sophie Refle による同書のフランス語翻訳版である *Petites boîtes* である。

§2　談話やテクストにおけるテンス・アスペクト

談話やテクストにおけるテンス・アスペクトの問題に関しては数多くの先行研究が存在し、それらを網羅的にとりあげることは難しいため、ここではそれらの中のいくつかに言及する。

樋口・大橋(2004)では、小説に見られる時制現象として、日本語では時制選択の基準となる視点が可動的であるのに対し、英語では時制選択の基準となる視点が基本的に発話時に対して固定的であることが述べられている。

井元(2010, 2017)では、川端康成の『雪国』の冒頭部分の日本語原文、英訳、仏訳をとりあげ、日本語ができごとよりの視点から事態を描写するのに対し、英仏両言語による翻訳では日本語のような視点の置き方によって事態を描写することが難しく、外的視点からの描写となっていることを示している。

東郷(2011)では、物語の冒頭で用いられる大過去形の用例や著名人の訃報記事におけるさまざまな時制の用例の分析等を通じて、文を越えた談話構築の機序を踏まえた時制メカニズム理解の重要性が指摘されている。

甲田(2024)では、マンガなども視野に入れ、物語、昔話、神話、伝説等、さまざまなジャンルにおける時間性のちがいが言及され、「テクストにおけるテンスやアスペクトの使い分けは事象の性質や動詞の種類によって決まるというよりも、テクスト全体の中での相対的価値によって決定される。」、「物語は一般に全ての出来事が同じスピードで描かれるのではなく、すべての登場人物も均等に描かれるのではない。前景化と背景化を描き分けながら話は展開する。」と述べられている。

§3　フランス語のテンス・アスペクト形式と視点

実例の分析に入る前に、フランス語のテンス・アスペクト形式と視点の関係についての基本的な考え方を示しておく。本稿では東郷(2011)の主張にしたがい、フランス語のテンス・アスペクト形式は発話時 t_0 に視点をおいて眺めたできごとをあらわす群と、過去のある時点 t_1 に視点を移動させ、t_1 から眺めたできごとをあらわす群に分類されるものとする。前者には現在形、複合過去形、単純未来形、前未来形が属し、後者には半過去形、大過去形、条件法現在形、条件法過去形が属する。

次節以降では、東郷(2011)のテンス・アスペクト形式と視点の関係に関する主張にもとづき、日本語およびフランス語の時制と視点の取り方について実例を分析していく。なお、本稿では原則として用例の引用は段落、パラグラフ単位で行うこととする。

§4　語りの現在に視点を置いた描写

まずは日本語とフランス語においてほぼ同等のはたらきを行うと考えられるテンス・アスペクト形式が用いられ、同じような視点の取り方によって描写が行われている場面を見る。(1), (2) はこの作品の冒頭の場面である。

(1) 私の住んでいる家は、昔、幼稚園だったので、何もかもが小振りにできている。扉や窓や階段はもちろん、靴箱、掛け時計、水道の蛇口、椅子と机、本棚、電気スタンドの笠などなど、あらゆ

るものが幼児に相応しいサイズになっている。家具の角は丸みを帯び、スイッチの位置は低く、ドアノブは掌にのる果実ほどの丸みしかない。

(2) La maison où j'habite était autrefois une école maternelle, et tout y est petit. Tout a une taille adaptée aux petits enfants, les portes, les fenêtres, l'escalier, mais aussi les casiers à chaussures, les pendules murales, les robinets, les tables et les chaises, les étagères, les abat-jour des lampes. Les meubles ont des angles arrondis, les interrupteurs sont placés bas, et les poignées de portes n'ont que la rondeur de baies qui tiennent sur la paume d'une main.

(1) において「昔、幼稚園だった」以外の動詞はすべてル形であり、それに対応する (2) のフランス語においても « était autrefois une école maternelle » 以外の動詞は現在形になっており、ここでは語り手が語りの現在時に視点を置き、目の前に存在しているものを描写していると解釈することができる。このような例において、日本語のル形とフランス語の現在形は同じような視点から状況を描写しており、同じようなはたらきをしていると考えることができる。

実際に『小箱』の原文と *Petites boîtes* を観察するとこのような例は随所に見られる一方で、日本語のル形に対してフランス語の現在形以外のテンス・アスペクト形式が用いられる例も少なからず存在する。次節からはそのような例に着目し、日本語とフランス語においてそれぞれどのような視点の取り方により当該事態の描写が行われているかを見ていく。

§ 5　過去のできごとの描写とテンス

前節で見たように、日本語のル形とフランス語の現在形が対応する形で用いられることは珍しいことではなく、特に (2) のように être や avoir など状態をあらわす動詞が現在形で用いられる場合には特段の問題は生じない。

しかし、動作をあらわす動詞が用いられる場合には、日本語のル形がそのままフランス語の現在形に対応しないことがある。次の (3) では、1 文目の文末はタ形の「崩れ落ちた」になっているが、2 文目以降ではル形またはテイル形の「いる」、「落ちてゆく」、「追いかける」、「絡みつく」、「守ろうとしている」、「いともたやすく、風にさらわれてゆく」、「何の抵抗もしない」となっている。それに対応する (4) のフランス語では、日本語のタ形、ル形、テイル形のいずれも、それぞれ « s'est désagrégée », « se sont effondrés », « ont roulé », « se sont soulevées », « se tenaient », « n'a eu aucun mal », « ne lui ont opposé aucune résistance » というように過去形の複合過去形または半過去形になっている。

(3) あれほど濃密に一つの形を保っていた演奏者たちの影は、たちまち崩れ落ちた。尻もちをついて手足をばたつかせる者もいれば、両膝を折り、咆哮するように四つ這いになる者もいる。またある者は身を守るためか風に逆らえないためか、斜面を転がり落ちてゆく。脱げた靴が後ろを追いかける。誰の髪もみな逆立ち、メガネは飛び、スカートはめくれ上がって腰に絡みつく。そうなってもなお、誰もが両耳を押さえ、自分の楽器を守ろうとしている。楽器はいともたやすく、風にさらわれてゆく。風に身を委ねるのが自分たちのあり方だと、よく承知しているその素直さのまま、何の抵抗もしない。

(4) L'ombre des musiciens qui avait préservé cette extraordinaire densité s'est désagrégée sur-le-champ. Des musiciens ont culbuté, d'autres se sont effondrés à genoux, ou même à quatre pattes comme pour pousser un rugissement. Peut-être incapables de résister au vent, ou pour protéger leur corps, certains ont roulé sur la pente, suivis par les chaussures qui avaient quitté leurs pieds. Sur toutes les têtes, les cheveux se sont dressés, les lunettes se sont envolées, les jupes se sont soulevées jusqu'aux hanches. Même à un tel moment, ils se tenaient les oreilles des deux mains pour protéger leurs instruments. Le vent n'a eu aucun mal à les emporter. Ils ne lui ont opposé aucune résistance, dociles comme s'ils savaient qu'ils étaient d'accord pour lui confier leur sort.

(3) および (4) におけるテンス・アスペクト形式の用法を分析すると、日本語の描写のしくみとフランス語の描写のしくみにはちがいが見られることが分かる。(3) において 2 文目以降で用いられているル形は、いずれも過去に起こったできごとを描写していると解釈されるが、ル形を

連続して使用することによって一連のできごとが次々と目の前で展開している様子が描写され、その結果として臨場感が感じられるようになっている。日本語ではできごと寄りの視点が取られる場合にル形が用いられることが多く、当該のできごとが現在のできごとであるのか過去のできごとであるのかは、基本的には文脈によって判断される。(3) では 1 文目でタ形の「崩れ落ちた」が用いられていることから、2 文目以降のできごとが過去に位置づけられるべきものであると判断される。

それに対して (4) のフランス語では、語り手の視点は語りの現在時に置かれたままでそれぞれのできごとが起こった様子が描写されている。その中で、日本語の「守ろうとしている」に相当する部分では半過去形の « se tenaient » が用いられており、当該のできごとが起こった過去の場面に語り手の視点が移動し、その場面に居合わせているかのような効果がもたらされる。

フランス語では、基本的には発話時に視点を置き当該のできごとが発話時に位置づけられるものとして描写される場合に現在形が用いられるため、(4) のような場面では 2 文目以降で現在形を用いて過去のできごとを描写することは難しい。日本語のル形がもつ臨場感の効果は、ここでは複合過去形の連続の中に半過去形が用いられることによって生じると考えられるが、日本語の描写のしくみとフランス語の描写のしくみは視点の取り方において異なっている。

§ 6　過去のできごとの描写とアスペクト

次に、アスペクトに関わる問題を検討する。一般的には、完了的にとらえられた過去のできごとは日本語ではタ形によって、フランス語では複合過去形によって描写され、未完了的にとらえられた過去の出来事は日本語ではテイタ形によって、フランス語では半過去形によって描写される。しかしながら、次の場面では、日本語ではタ形とテイタ形が使い分けられているのに対して、フランス語ではすべて半過去形が用いられている。

(5) はじまりの合図がないのと同じく、音楽会の終わりも静かに訪れた。一人、また一人、演奏者は耳たぶから楽器を外し、専用の小箱に収めたり、上着の内ポケットにそっと仕舞ったりした。それを合図に見学者たちも、残り少ない眠りのために丘を下りていった。町と空の境目から、夜明けの気配が忍び込もうとしていた。

(6) Le concert qui avait commencé sans que personne ne donne de signal s'achevait aussi sereinement. Un à un, les musiciens détachaient leur instrument de leur oreille, le rangeaient dans la petite boîte prévue à cet effet ou le glissaient dans une poche intérieure de leur veste. C'était le signal pour les spectateurs de redescendre de la colline afin de rentrer chez eux dormir quelques heures. L'aube essayait de se glisser à la limite du ciel et de la ville.

(6) では主節の動詞 « s'achevait », « détachaient », « rangeaient », « glissaient », « était », « essayait » はすべて半過去形になっており、いずれのできごとも過去に置かれた語り手の視点から描写されている。特に最初の « s'achevait » について、一般的には完了的な過去形が用いられるのであるが、ここでは未完了的な半過去形が用いられている点に着目したい。このような半過去形は「語りの半過去形(imparfait narratif)」と呼ばれ、もっぱら文学作品等の書き言葉において用いられる。

Bres(2005)においてボリス・ヴィアンの『日々の泡（うたかたの日々）』から (7) の口づけの場面が引用され、この部分を読んだときにこの世で最も美しい口づけを目にしたかのような印象を受けたということが述べられている。

(7) Je… dit-il tout contre son oreille, et, à ce moment, comme par erreur, elle tourna la tête et Colin lui embrassait les lèvres. Ça ne dura pas très longtemps.

(7) では、「口づけをした」が半過去形の « embrassait » で描写されており、主人公のコランとクロエによる偶然の口づけの場面が印象づけられている。ここではこの場面の中に語り手の視点が入り込み、口づけというできごとがクローズアップされ、物語における時間の流れが瞬間的に緩むような表現効果が感じられる。語りの半過去形を用いることによって生じるこのような表現効果は、映画のスローモーション再生にたとえられることもあり、物語の世界の時間の流れが語

り手によって主観的に引き延ばされているような印象が生じる。

(6) の冒頭にあらわれる半過去形の « s'achevait » についても同様の表現効果が認められる。音楽会の終了自体は瞬間のできことであったとしても、終了後の演奏家や聴衆たちの様子、そして夜明けが訪れようとしている状況も合わせて半過去形の連続によって描写されることにより、音楽会が終了した場面全体が強く印象づけられるように感じられる。

次の例でも、(8) の日本語ではタ形とル形が混在しているが、 (9) のフランス語においては一貫して半過去形が用いられてこの場面全体の描写がなされている。ただし (9) における半過去の中には、過去において反復的に行われた行為をあらわすものが含まれる。

(8) 私が帰ったあと、従姉は週末の間中ずっと、そして月曜が来れば、お弁当を全部売った後の午後から夜にかけて、図書館の本を読んで過ごすはずだった。それ以外、他に何をすべきことがあるか、想像できなかった。積み上げられた本を上から順に一冊ずつ手に取り、読み終わればベッドの下へ押し込め、新しい一冊を開く。次に私が来た時、ベッドの下から引っ張り出した本たちを図書館へ返し、机に新たな山を築く。その繰り返しだった。

(9) Après mon départ, ma cousine devait passer le week-end à lire les livres de la bibliothèque, et à partir du lundi, reprendre sa lecture jusqu'à la nuit quand elle rentrait chez elle après avoir tout vendu. Je ne pouvais pas me figurer qu'elle ait autre chose à faire. Elle saisissait le premier livre de la pile, le mettait sous son lit après l'avoir lu, et passait au suivant. Quand je revenais chez elle, je rapportais à la bibliothèque ceux qu'elle sortait de sous le matelas et créais une nouvelle pile sur sa table. Puis cela recommençait.

§ 7　場面転換と視点

日本語の小説では、過去のできごとを語りながら、登場人物の視点を取り現在形でそのときの状態を表現するのは珍しいことではない。ところが、次の場面では日本語でテイタ形が用いられているのに対して、フランス語では現在形が用いられている。

(10) いつの間にか月が雲に隠れ、夜露に濡れた足元から冷気が立ち上っていた。夜が更けるにつれ、少しずつ風は止んでいった。まだ終わりにしたくない演奏者たちは、より深く背中を丸め、風の気配を探して神経を集中させていた。

(11) La lune s'est cachée dans les nuages et la froidure monte des pieds trempés par la rosée nocturne. Plus la nuit avançait, plus le vent faiblissait. Les concertistes qui n'avaient pas envie de s'arrêter se recroquevillaient sur eux-mêmes, concentrés sur leur quête d'un souffle.

日本語の (10) では「立ち上っていた」、「止んでいった」、「集中させていた」というように一貫して過去のできごとが描写されており、この場面において視点の移動が生じているとは感じられない。

それに対して、フランス語の (11) では 1 文目と 2 文目の間で視点の移動が生じている。1 文目では語り手の視点は語りの現在時に置かれており、そこから前半の複合過去形の « s'est cachée » によって月が隠れて見えなくなった状態になっていることが描写され、後半ではそのような状況において語り手の目の前で冷気が立ち上っている様子が現在形の « monte » によって描写されている。そのあとに続く 2 文目では語り手の視点が過去に移動して半過去形による描写が行われ、3 文目でも半過去形による描写が続く。

(11) の 2 文目以降での過去の視点からの描写は (10) の日本語にほぼ相当していると考えることができるが、ここではなぜ 1 文目で語りの現在時に視点を置いた描写が行われているのかが問題となる。その理由を探るためには、この場面に先行する場面がどのようなものであるかを見る必要がある。(12) と (13) は、それぞれ (10) と (11) の直前の段落、パラグラフから後半部分のみを引用したものである。

(12) (…) 思わずその場に両膝をつき、掌に残る温もりを引き寄せ、抱き留めるようにして耳の楽器に手をやってしまいそうになるのを、男はどうにか押しとどめる。どんなにすぐ耳元でそれが聞こえていたとしても、爪の生えていたあの小さな手は彼方に去って、もはや戻っては来ない。

(13) (…) il parvient de justesse à résister à l'envie de s'agenouiller et de couvrir de ses mains les instruments qui pendent à ses oreilles pour leur apporter la chaleur qui subsiste sur ses paumes. Les mains minuscules sur lesquelles poussaient ces ongles sont parties à jamais, même s'il vient de les entendre au fond de ses oreilles.

(10), (11) の直前の場面である (12), (13) において、日本語ではル形が用いられており、フランス語でも現在形が用いられている。(11) のフランス語の 1 文目で現在形が用いられているのは、場面を切り替える位置を日本語の原文とはずらし、(11) の 1 文目までがその前のパラグラフ (10) と同一の場面としてとらえられ、(11) の 2 文目以降で視点が移動し、あらたな場面が展開されているからであると考えられる。

(10) の日本語では冷気が立ち上っていることに気づいたことが、あらたな場面のはじまりのできごととして描写されており、これに続く描写も同じ場面のできごととしてとらえられている。

一方で (11) のフランス語では、1 文目までのできごとが同一場面において展開される一連のできごととしてとらえられていることが分かる。それは、直前の (11) とそれに続く (13) の 1 文目までのできごとは、いずれも目の前で展開しているできごととしてとらえられるのに対して、(13) の 2 文目では時間の経過が感じられるからである。

(10) の「夜が更けるにつれ、少しずつ風は止んでいった。」は、(11) では « Plus la nuit avançait, plus le vent faiblissait. » となっており、一種の比較表現が用いられている。« Plus 〜, plus 〜 » という構文は複数の場面を比較したうえで漸次的に事態が変化することを描写するために用いられるため、フランス語においては、ここで、それ以前の場面とは質的に異なる時間の流れが意識されていると考えることができる。

§ 8　逆従属構文による場面転換と視点

場面転換の観点からは、テンス・アスペクト形式だけでなく、構文の選択が重要となる場合もある。次の (15) は逆従属構文と呼ばれるものであり、一般的には英語の what 節に相当する lorsque 節に対して前置された主節では半過去形が用いられることが多いとされている。(15) では主節において大過去形が用いられている。

(14) 朝、講堂の掃除が終わるか終わらないかのうちに、一人、男性が渡り廊下を通ってやって来た。

(15) Ce matin, j'avais presque fini le ménage de l'auditorium lorsqu'un homme est arrivé par la galerie.

(15) において主節の大過去形の « avais fini » は lorsque 節の複合過去形の « est arrivé » によってあらわされるできごとに先行するできごとを描写している点に関しては一般的な用法であるといえる。しかし、この例においても視点の問題が関与している。逆従属構文は、視点を特定するための時況節である lorsque 節を後置してあらたなできごとを描写することにより、想定外の意外なできごとが突然生じたような意味効果を狙って用いられることが多い。

大過去形は半過去形と同様に過去に視点を移動させたうえで当該のできごとを描写するために用いられる時制であり、lorsque 節で用いられている複合過去形は発話時に視点を置いて当該の出来事を描写するために用いられる時制である。視点移動の観点からも、(15) では前置された主節によって描写されるできごとと後置された lorsque 節によって描写されるできごとの間には断絶が見られるのである。

逆従属構文による意外性や突発性という意味効果は、テンス・アスペクト形式だけではなく時況節の lorsque 節や、さらには lorsque 節の主語として用いられた不定名詞句 un homme がともに用いられることによって相乗的に生じる。

§ 9　場面の重層性と視点

日本語においてはル形とタ形の対立によって場面の転換が表現されることが多い。ところが、フランス語には過去形が複数存在するため、さまざまな過去形の使い分けによって場面が重層的に描写されることがある。次の引用では語り手の過去の思い出を語るために、日本語ではル形と

タ形が、フランス語では半過去形と複合過去形と大過去形がそれぞれ使い分けられている。

(16) もしかしたら少しずつ、体がこの家に合うよう、縮小しているのかもしれない。私は子どもの頃観た、世界中の残酷な出来事を集めた映画のことを思い出す。貧しい少女が小さな檻に閉じ込められ、無理やり奇形にさせられ、見世物小屋に売られてゆくのだ。それを真似て弟と私はカマキリをキャラメルのおまけの箱に閉じ込め、自分たちだけの昆虫を生み出そうと試みた。鎌を振り上げて抵抗するカマキリに、幼い弟は一瞬怯んだが、実験への期待を抑えきれないといった様子で目を見開いていた。鎌の先のとげとげが指に刺さるのも構わず、私はそれを箱に押し込めた。

(17) Il se peut qu'il rétrécisse petit à petit, de manière à s'y adapter. Je me rappelle un film que j'ai vu enfant, un recueil d'événements cruels survenus dans le monde. Une fillette pauvre était séquestrée dans une petite cage ; devenue difforme, elle était vendue tel un phénomène de foire. Suivant cet exemple, mon petit frère et moi avions essayé de créer un insecte rien qu'à nous en enfermant une mante religieuse dans la boîte d'un gadget offert avec un paquet de bonbons. Mon frère qui était encore petit avait eu un instant de frayeur lorsque la mante avait résisté en levant ses pattes ravisseuses, mais il avait écarquillé les yeux, si grandes étaient ses attentes de notre expérience. J'avais forcé la mante à entrer dans la boîte sans craindre que les pointes acérées de ses pattes ne me griffent les doigts.

ここでまず注目すべきことは、日本語の「売られてゆくのだ」が (17) のフランス語では « était vendue » という半過去形になっている点である。この場面では語り手が子どもの頃に観た映画の内容を思い出して語っている。「売られてゆくのだ」という日本語からはあたかも過去に観た映画が今、目の前で上映されているかのような印象が感じられる。しかし、ここでフランス語の現在形を用いると、現実の世界の描写のように感じられてしまう可能性があるため、フィクションとしての映画の内容であることを喚起させるために半過去形が用いられていると考えられる。

さらに興味深いことは、日本語では同じタ形が用いられているところで、フランス語では複合過去形と大過去形が使い分けられている点である。次の (18) のように、大過去形(avait offerte)は基本的には英語の過去完了形に相当し、複合過去形(a cassé)によってあらわされるできごとに先行するできごとをあらわすのが一般的なはたらきである。

(18) Paul a cassé la montre que sa femme lui avait offerte.「ポールは妻から贈られた腕時計を壊してしまった。」

ところが (17) では、「子どもの頃観た」が複合過去形の « ai vu » になっているのに対し、時間的に後続する形で起こったと解釈されるべき一連のできごとである「試みた(avions essayé)」、「抵抗する(avait résisté)」、「見開いていた(avait écarquillé)」、「押し込めた(avais forcé)」がすべて大過去形になっている。したがって (17) における一連の大過去形の使用には、他のできごととの間の先後関係を明示するはたらきとは別のはたらきが関与していると考える必要がある。

(17) における大過去形の使用を動機づけているのは、やはり視点の移動とそれにともなう場面の転換であると考えることができる。複合過去形が語りの現在時に視点を置き、そこから見た過去のできごとを描写するために用いられるのに対し、ここでの大過去形は過去の子供時代に視点を移動させ、その過去の時空間の中で生じるできごとを描写していると解釈することができる。

これらの時空間同士の時間関係は同一の時間軸上で直線的に表示できるとはかぎらず、さまざまな過去形が使い分けられ、複数の過去のできごとがそれぞれ質的に異なる時空間において重層的に展開されるものとして描写されることがある。フランス語においてはそのような場面の重層性を生み出すために、視点移動をともなう半過去形や大過去形が効果的に用いられている。

このような場面の重層性は、思い出以外の要素によっても生じうる。次の例は、現実の世界と映像（ビデオ録画）の世界とが重なり合って描写される場面である。語り手は、特別な夜にだけ、幼稚園児たちが出演するお遊戯会での演劇を録画したビデオテープを鑑賞するのであるが、ここではビデオテープを鑑賞しながら感じたことが述べられる。

(19) ここが、私にとって最も緊張する瞬間だった。本当に彼らは幕の向こう側にいるだろうか。当り前じゃないかといくら自分に言い聞かせても、何度ビデオを見返しても、この不安からは逃れられなかった。毎回、誰一人姿のない、大きなかぶがただ一つだけ取り残されてがらんとした舞台が、まぶたに浮かび上がってきた。その像を打ち消すため、私は懸命に瞬きをした。私の気持など知る由もなく、保護者たちは我が子の緊張具合いやカメラのフィルムの残りや、そんな平和な心配に心を奪われている。

(20) À ce moment-là, la tension est à son comble pour moi. Les enfants sont-ils derrière ? Même si je me répète que la réponse est évidente, et que j'ai regardé la vidéo un nombre incalculable de fois, je n'échappe pas à cette angoisse. La vision de la scène déserte, sans aucun enfant, où seul restait le navet géant, s'imposait à mes yeux que je fermais plusieurs fois pour la chasser. Les parents qui n'ont aucune raison de connaître mes craintes sont préoccupés par des soucis paisibles. Leurs enfants ne seront-ils pas trop tendus ? Ont-ils encore assez de film dans leur appareil photo ?

(19), (20) の例からも、常に日本語のタ形とフランス語の過去形が対応しているわけではないことが分かる。(20) では視点の置き方を変えることにより、2 つの異なる場面が構成されていると解釈することができる。1 文目と 2 文目、そして 4 文目では視点を語りの現在時に置いた現在形(est, sont, me répète, échappe, ont, sont)、複合過去形(ai regardé)、さらに (19) には直接対応する表現が見られない単純未来形(seront)までもが用いられているのに対し、3 文目においては視点を過去に置いた半過去形(restait, s'imposait, fermais)のみが用いられている。

3 文目のできごとだけがその他の文のできごととは異なる場面として構成されているのはなぜであろうか。ここでは実際にビデオに録画された場面を鑑賞しているのではなく、語り手が抱く虚像に関する描写がなされているのである。そして、その虚像を打ち消すために繰り返しまばたきをすることも、実際にビデオに録画された場面とは次元の異なる行為として描写されていると考えることができる。

そして 4 行目で語られる保護者の様子は、ふたたび語りの現在時に視点を置いたテンス・アスペクト形式によって実際のできごととして描写されるのである。

§ 10　まとめと今後の課題

本稿では、日本語の文学作品とそのフランス語翻訳において用いられるテンス・アスペクト形式の分析を手がかりとして用例分析を行い、談話における事態認識とその言語化としての事態描写に関わる視点の問題について考察を行った。

本稿における分析から明らかになったことは、日本語とフランス語それぞれのテンス・アスペクト形式の間には、形式的に対応するものとして一般化できる単純な関係が存在するわけではなく、個々の談話構成のあり方に応じてそこには多様な対応関係が成立するということである。

本稿に残された課題としては、単純過去形と視点の問題について考察することができなかったことがあげられる。本稿で分析の対象とした『小箱』においても、次の (22) のように単純過去形による描写が散見される。

(21) 最後、バリトンさんの順番が来た。言うまでもなく、バリトンさんは歌をうたう。皆とても楽しみにしている。話すためではなく、歌うためだけに彼が歌うのを聴くのは初めてだ、と思うだけで私は緊張する。そのうえ伴奏の責任が重くのしかかり、指が震えてしまう。

(22) Le tour de M. baryton arriva en dernier. Nul besoin de préciser qu'il chanta. Tout le monde s'en réjouissait d'avance. C'est la première fois que je l'entendais chanter pour chanter non pour parler, et j'étais très tendue. La lourde responsabilité de l'accompagner m'incombait, j'avais les doigts tremblants. P.197

東郷(2011)では、単純過去形は発話時にも特定の過去時にも視点を置かず、超越的な立場から過去のできごとを描写する際に用いられるとされているが、(22) のような例を適切に分析するためには単純過去形と視点の関係についてさらに緻密な考察を重ねる必要があると考えられる。

より大きな問題点として、本稿の分析対象が限定的であるため、考察も限定的である点を指摘しなければならない。今後は分析対象をさらに広げ、日本語およびフランス語のテンス・アスペ

クト形式についてより一般性のある主張を行う必要がある。

また、現代ではフランス語で書かれた文学作品の多くにおいて基調となるテンス・アスペクト形式として現在形が用いられることが多いが、作家によっても異なる。そのため、今後はさまざまな文学作品を分析し、多くの作家に共通する一般的な用法と作家によって特徴が見られる用法とを見極めることも重要である。

今後は上で述べた諸課題に取り組み、引き続きより多くの用例分析を行いながら談話構築における視点とテンス・アスペクトの問題を体系的に論じることを目指したい。

引用文献

小川洋子(2019)『小箱』朝日新聞出版.
Yôko OGAWA, traduit par Sophie REFLE(2022), *Petites boîtes*, Actes Sud.

参考文献

Jacques Bres(2005) *L'imparfait dit narratif*, CNRS éditions.
井元秀剛(2010)『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.
井元秀剛(2017)『中級フランス語　時制の謎を解く』白水社.
甲田直美(2024)『物語の言語学—語りに潜むことばの不思議—』ひつじ書房.
東郷雄二(2011)『中級フランス語　あらわす文法』白水社.
樋口万里子・大橋浩(2004)「節を越えて：思考を紡ぐ情報構造」，大堀壽夫（編）『認知コミュニケーション論』大修館書店, 101-136.